

八九年民主化運動にみる中国文化の一側面

(愛知大学大学院中国研究科) 田宮昌子

始めに

「天安門事件」⁽¹⁾として日本で一般に知られている一九八九年の民主化運動からすでに七年が経過しようとしている。政権による武力制圧の印象ばかりが残ってしまった感があるが、この運動は一九八九年四月十五日の胡耀邦前総書記の死をきっかけに始まり、六月三日、四日の武力制圧で幕を閉じるまで、約五十日間にわたって人民共和国建国四十周年、五四運動七十周年、フランス革命二百周年という一九八九年の歴史的位置を強く意識しながら、「科学と民主」、「救国」、「愛国」という中国近代の一連のテーマと「汚職糾弾」という時事的な関心を二本柱として展開した。政府への公民の異議申し立てという意味からいえば、人類社会に普遍的な社会現象ではあるが、同時に中国独自の歴史的、文化的系譜を背景に持っていた。学問をし、国家経営に関わる資格のある人間たちによって担われてきた政治改革要求の、殆ど有史以来ともいえる長い系譜があり、救国、愛国を掲げてきた近代化運動の系譜にも連なっている。また、中国大衆の価値観に見事にアピールし、北京市民を始め香港や台湾、世界各地の華人社会に至るまで、凡そ自らを中国人と意識する人々に強い共感を呼び起こした稀有な文化現象でもあった。本稿が取り扱おうとするのは、この文化現象としての側面である。特に大学生たちによるハンスト開始後の事態の展開と社会（北京市民から更には海外の華人社会に至るまで）における反響の中に、非常に“中国的な”文化符号が豊富に含まれているように思われた。民主や人権などの人類共通の希求とはまた別に、中国人の心の琴線を揺り動か

している何かがあるのである。そこには人々が無意識の内に共有している文化的基盤があって、学生たちへの支持の声の高まりは、その目に見えない基盤を「広場」として人々がそこに馳せ参じる、という図式であるように私には見えた。彼らが共有しているこの「基盤」は一体どのような要素から形成されているのか。それを考察してみたい、というのが本稿の趣旨である。

具体的には、大学生たちがハンスト開始を宣言した、所謂「絶食書」をまず手がかりとして取り上げる。一九八九年五月十三日、二百名ほどの大学生たちが始めたハンガーストライキは瞬く間に三千人に膨れ上がり、一度は退潮に差し掛かったと見えた学生運動が、社会各層を巻き込む規模へと空前の盛り上がりを見せる転換点となった。同時に、運動前半をリードしていた理性的民主化運動を志向する動きを情緒的な高まりが飲み込んでいく転換点ともなったように思える⁽²⁾。これ以後、運動は悲壮な「救国愛国」色を強めていく。これから取り上げる「絶食書」は、この情緒の高まりがどんな姿をしていたかを示す好例である。極度の疲労と緊張感に加え、死を意識した特殊な高揚状態で書かれたこの一文には、運動を担った学生たちの思考様式、価値観、潜在意識が映し出されている。「心理カルテ」という副題を付ける所以である。

一、 「絶食書」—運動を担った大学生たちの心理カルテ

ハンスト宣言は三種程が文献に記録されているが⁽³⁾、ここに取り上げる一文はそれらの中で最も広く知られたものである。情緒的にかなり高ぶっ

た状態で書かれたと思われ、宣言文というより心情の訴えに傾いた内容となっている。それだけに運動を担った大学生たちの心理や思考様式、価値観を考察するのに格好の手掛かりを提供してくれる。まず、順を追って見ていこうと思う。

陽光きらめく五月に、我々はハリストを決意した。人生で最も美しい青春の只中にあって、私たちは生きていることの喜びの全てを決然と捨てて旅立たなければならぬのだ。しかし、(a)私たちの心はどんなに無念で諦め切れないことか！
 …我们却不得不把一切生之美好绝然地留在身后了⁽⁴⁾、但我们是多么的不情愿，多么的不甘心啊！

宣言文の冒頭で、自分たちの行動が不本意な選択であることを強調する。“却不得不”（～なければならない）の表現と“多么的”（どんなにか）の反復は決意の表明というよりも被害意識を感じさせるものとなっており、自分たちの心情を訴えつつ、ある対象を責めようとする心理が感じられる。

しかし、国家は既にこのような事態に立ち至っている。（中略）この民族存亡の危機に当たって（在这民族存亡的生死关头）、同胞の皆さん、全ての良心ある同胞の皆さん。私たちの呼びかけを聞いて下さい！
 国家は我々の国家である
 人民は我々の人民である
 政府は我々の政府である
 我々が声を上げねば、
 他に誰がいようか？
 我々がやらねば、

他に誰がいようか？⁽⁵⁾

(b)私たちの肩はまだ幼く、死は私たちにまだあまりに大きな重荷である。しかし、私たちは行く。行かねばならぬのだ。歴史が私たちにそう求めているのだ。

尽管我们的肩膀还很柔嫩，尽管死亡对于我们来说，还显得过于沉重，但是，我们去了，我们却不得不去了，历史这样要求我们。

ここでは肉体に言及しながら、自分たちの若さ（未熟さ）を言う。そして“尽管”（～であるとしても）の反復と再び使われる“却不得不”のフレーズに被害意識（不本意な行動をとる恨めしさ）がにじむ。

私たちの最も純粋な愛国心が、最も優れた(c)赤子の思い（赤子心灵）が、「動乱」とされ、「下心あり」、「一部の悪人に利用された」と言われている。

“赤子”とは、文字通りには生まれたばかりの赤ん坊のこと⁽⁶⁾。その「赤子之心」は「生まれたばかりの赤ん坊のように無垢な心」として、『老子』や『孟子』に登場している⁽⁷⁾が、現代では国家や民族、党など大義に対する「純粋な忠誠心」を意味する場面に使われることが多い⁽⁸⁾。この宣言文では愛国心と“赤子の思い”を捧げているのに「動乱」、「下心あり」と決めつけられる、と訴えている。「動乱」云々は為政者から出た評価であるから、“赤子”で表わしているのは国家への思いであり、無意識のうちに国を親とし（ここでは母か父かは限定されていない）、自分たちを子とする設定が行われている。

私たちは全ての誠実なる中国公民

に求める。(中略)胸に手を当てて、
良心に問うてみて下さい。(d)私たちが
に何の罪があるのでしょうか？私たちが
がしたことは「動乱」でしょうか？
私たちの授業放棄、デモ行進、ハン
スト、献身⁽⁹⁾は一体何の為でしょう
か？

…我们有什么罪？我们是动乱吗？我
们罢课，…献身，到底是为了什么？

しかし、私たちの思いは一度ならず
愚弄され、空腹に耐えて真理を求め
ているのに警察の殴打に遭い、…ひ
ざまづいて民主を求める学生代表は
見て見ぬ振りをされ、平等対話の要
求は度重なる引き延ばしに遭い、学
生リーダーの身には危険が迫ってい
る…

私たちはどうすればよいのか？

民主は人にとって最も崇高な生の
願望である。自由は人が生まれなが
らにして持っている天賦の人権であ
る。にもかかわらず、私たちの若い
命をかけて求めなければならないと
は、これも中華民族の誇りだとでも
言うのでしょうか？

社会各層に自分たちの払っている犠牲及びその
辛さを訴え、社会の義憤、同情、共感を求める段
である。まず人々の“良心”に訴えかける点に注
目したい。

ハンストはやむを得ずしてこれを
為す。また、これを為さざるを得ず。

私たちは死の覚悟を以て生のため
に闘う。

(e)でも、私たちはまだ子供、子供

なのです！(f)母なる中国よ。あなた
の子どもたちをよく見て下さい。飢え
が無情に彼らの青春を蝕み、死がま
さに一步一步近づこうとする時に、
(g)あなたは何もお感じにならないの
ですか？

但我们还是孩子，我们还是孩子
啊！中国母亲，请认真看一眼你的儿
女吧，虽然饥饿无情地摧残着他们的
青春，当死亡正向他们逼近，您难道
能够无动于衷吗？

“以死的气概，为了生而战”（死の覚悟を以て
生のために闘う）。このフレーズは大学生たちの
心意気を象徴するものとして、その後あちこちの
文章に登場することとなった。この決意の直ぐ後
に「私たちはまだ子供、子供なのです！」という
叫びが響き、母親に同情と救いを求めている。自
分たちは祖国のためならば、このような決意を持っ
ているけれども、まだ本来なら社会全体の愛護を
受けてしかるべき子供である。「母なる中国よ
（その為政者である人々よ）、自分の骨肉がこれ
程苦しんでいるのを見て、良心は痛まないか？」
と訴えるのである。自分の払う犠牲を言い、自分
が本来ならまだ保護されるべき立場であることを
強調する。これが道義上、為政者を責めることに
なり、広範な一般大衆の道徳体系にも働きかけて
強い同情心を喚起する構造になっている。

私たちは死にたくはない。思いき
り生きていたい。私たちは人生で最
も美しい年齢にあるのだから。私た
ちは死にたくはない。思いきり学び
たい。祖国はまだこんなに貧しいの
に、このまま祖国を残して死んでし
まうなんて。私たちが求めているの
は決して死ではない。しかし、もし

一人の或いは一部の人間の死によって、より多くの人々がより良く生きられるのならば、祖国を豊かで繁栄したものになるのならば、私たちは生を貪っている権利はないのです。

私たちがお腹をすかしていても、
(h)父さん、母さんたち、どうか悲しまないで下さい。私たちがこの世に別れを告げる時、(i)おじさん、おばさんたち、どうか心を傷めないで下さい。

当我们挨着饿时，爸爸妈妈们，
你不要悲哀：当我们告别生命时，
叔叔阿姨们，请不要伤心。

私たちの希望はただ一つ。より良く生きること。私たちの願いはただ一つ。どうか忘れないで下さい。私たちが求めたのは、決して死ではなかったことを！民主は全ての人の問題であり、決して一代で実現できるものではありません。

死は最も広範で、永遠に止むことのない反響を願っているのです。

“爸爸妈妈们”は学生たちの具体的な父母たちというよりも、社会全体の母たり父たる人々への呼びかけであると考えられる。“叔叔阿姨们”も同じである。このように親族呼称で呼びかけることによって、社会全体からなる大家庭のある特定の構成員としての意識を人々に喚起するのである。

(中略)

(j) { さらば、友よ！御自愛あれ！死者と生者は同じように忠誠なり。

さらば、愛する人よ！御自愛あれ！
去り難くはあれど、別れを告げねば

ならぬ。

さらば、父よ母よ！(l)忠孝並びた
たざるをお許し下さい。

さらば、人民よ！このような不本
意な形で(l)ご恩に報いることをお許し下さい。

別了，同仁，保重！死者和生者一样的忠诚。

别了，爱人，保重！舍不得你，也不得不告终。

别了，父母！请原谅，孩儿不能
忠孝两全。

别了，人民，请允许我们以这样不得已的方式报恩。

私たちの生命で書き上げた誓いが、いつの日か必ず共和国の空を晴れ渡らせることでしょう！(10)

(j)の部分については、当時“天安門広場防衛指揮部総指揮”という肩書きで学生たちの指揮をとっていた柴玲が一九九二年に発表した文章(11)の中で、この四行はハンストを開始するに当たって大学生たちが彼らの社会関係に、つまり倫理関係に（本稿二、2）参照）別れを告げる段であると述べている。「愛する人よ！」の行では、この宣言文で繰り返される“不得不”（～ねばならない）が再び登場している。下線(a)「私たちの心はどんなに無念で諦め切れないことか！」に通じる「無念さ、あきらめ切れない気持ち」である。続く「父よ母よ！」の行では、長く伝統的価値の中で最大の論争点の一つであった“忠孝両全”が登場している。前述の柴玲の文章によると、当時二十歳そこそこであった彼らが託した意味は、「孝」が肉親への情が支配する“小家庭”の道德であるのに対し、「忠」は“大家庭”、つまり祖国のために行動することである。「祖国のために体を傷める、或いは生命を賭けるという行為は『孝』に

反する。しかし、自分たちは祖国を、『忠』をとったのだ。家庭倫理を突破したのだ』、と自己評価している。しかし、“小家庭”より“大家庭”を優先させるという価値観は、結局のところ家庭倫理を一步も出ていないといえる。最後の「さらば、人民よ」の行でも、「報恩」（恩に報いる）という、長年に亘り中国の正統文化の中心的価値の一つであった観念が登場する。しかし、伝統的には「報恩」の対象は父母か国であった⁽¹²⁾。現代中国においても、祖国（＝党）の育ての恩という形でこの国恩という観念は生き続けている。党の意向に反することは育ての恩に背く、という道義上の非難も生じうる。現に前述の柴玲の文章では「大学生は国家の“寵児”ではないか。十分恵まれているのに、この上まだ民主だ、自由だというのか？」という非難があったとして、これに反論している。中国の大学生たちは確かに国家に養成されている、という面がある。その“恩”を為政者からのものではなく、人民からのものとして認識しようとするところにこの置き換えが生じるのだろう。ハンスト開始にあたって、大学生の一人が残した遺書⁽¹³⁾の次の一節はこの解釈を裏付けるものではないだろうか。

お父さん、お母さん。

（中略）

私はこの世で二十二年間生きてきました。中国の大地が私をここまで育み、人民が小学、中学、大学へと進学する機会を私に与えてくれたのです…。その人民が私を必要としている今この時に、立ち上がらない事が出来るでしょうか。

私は生きて孝行を尽くすことが出来ないかも知れません。

（中略）

古来、『忠孝並びたらず』といい

ます。お父さん、お母さん、あなたの息子を分かって下さい！（後略）

古来忠孝不能两全、爸爸、妈妈、理解您的儿子吧！

このような“生死关头”（存亡の危機）⁽¹⁴⁾に身を置いた時に浮かび上がってくるものが、「忠誠」、「忠孝並び立たず」、「報恩」という価値であるところに、伝統と呼ばれるものが「深層心理領域において識域下の無意識の領分」⁽¹⁵⁾を支配するものであることを実感させられる。

以上、「絶食書」の文面を順を追って検討してきた。今まで指摘した諸点を整理してみると、以下の三現象が浮かび上がる。

一、“国”との間の擬似親子関係

下線(c)「赤子の思い」、(f)「母なる中国よ…」のように、祖国或いは中国という概念を親として、自分たちをその子と設定している。

二、社会への親族呼称での呼びかけ

下線(h)「父さん、母さんたち、どうか悲しまないで下さい」、(i)「おじさん、おばさんたち…」のように、社会の成員に親族呼称で呼びかけ、社会全体を擬似的大家庭と設定している。

三、自らの若さ（未熟さ）の強調

青年とはいえ、高等教育を受けた成人たちが、下線(b)「私たちの肩はまだ幼く、…」、(e)「…私たちはまだ子供なのです！」にみるように、自らを子供と呼び、自分たちの若さ（未熟さ）を強調し、社会の保護を求める。(a)「どんなに無念で諦め切れないことか」、(d)「私たちに何の罪があるのでしょうか」、(g)「…何もお感じにならないのですか！」ににじむ「被害意識」も自分たちは「まだ子供だ」（保護を受けるべき存在）という意識から発生すると考えられる。

次に、以上の三現象を手がかりに本稿の冒頭で述べた「文化的基盤」について考えてみる。

二、人々が共有する文化的基盤

第一章で取り上げた三現象は、いずれも「絶食書」の中でも直接的に読む者に訴えかけている箇所に見られる。これらの表現が訴えかけとして成立するには、訴える側と訴えかけられる側が共有している前提がある。この章ではそれらが何であるかを考察してみたい。

1) “国” との間の擬似親子関係

「絶食書」下線(c)「赤子の思い」、(f)「母なる中国よ。あなたの子供たちをよく見て下さい」において、親として想定されているのは「祖国」、或いは「中国」と表現するところの、中国人の精神的帰属先としての“国”である。この“国”は政権や国制の変遷に関わらず、人々の意識の中に不動にあるものといえる。この場合の「子」はこの“国”に帰属感を持つ人々の総体及びその中の個人であり、年齢に関わらず永遠に「子」であり続ける。この擬似親子関係の例を他に挙げると、一九八九年当時、新華社香港分社社長であった許家屯の回顧録に、七十歳代である許氏が国を去る際の心境が次のように記されている⁽¹⁶⁾。

たとえ生きて再び美しい山河をこの目で見ることが叶わずとも、苦難多き
母—祖国は憂患を共にした息子の魂を
迎えてくれることだろう！

…歴盡災難的母親—祖國，會讓一個憂
患與共的兒子，魂兮歸來！

この場合の“国”は政権や国制の変遷とは別の次元で、人々の意識の中に存在し続けるものであるが、同時に往々にして時の統治者（為政者）と重ね合わされて認識される。このような認識は被

治者の側にも為政者の側にも見受けられる。

一九八九年五月十八日、人民大会堂でハンスト学生代表と李鵬首相を筆頭とする政府要人との会見が持たれた。会見は李鵬首相の次の談話で始まった。

今日はまず一つのことについて話し合おう。つまり学生諸君のハンガーストライキをいかに早く終結させるかということだ。党と政府はこの事を非常に気にかけ、また不安に思っている。君達の健康がとても心配なのだ。（中略）君たちはまだ若い。一番年長でもせいぜい二十二、三歳だ。私の一番下の子供でも君たちよりずっと年上だ。私には三人の子供がいるが、一人として“横流し”などやっていない。しかし、みな君たちより年上だ。君たちは皆我々の実の子供のようなものだ。皆、肉親なのだ。

…你们都如同是我们自己的孩子，都是亲骨肉。

【人民日報】八九年五月十九日「李鵬氏らハンスト請願学生代表と会見す」

大学生たちを表わす言葉として「子供」（孩子）、「肉親」（亲骨肉）という語が使われている。「党と政府」と語り始めているので、「我々の子供」とは党と政府の子供ということになる。党と政府という国家の政治機構と大学生たちの間に親子関係が持ち込まれている。“亲骨肉”と言った場合、親子関係とは限らないが、血のつながりを持った関係である。

首相が大学生たちと自らの間に擬似的な親子関係を持ち出す。これは親しみを示すことでもあるが、同時に親族間の秩序を持ち込むことでもある。つまりここでは首相が家父長的に訓示を垂れ

る側であり、大学生たちは敬意と服従を示すべき側になるのである。もちろん、ここに持ち込まれる上下秩序に大学生の側も気付かない訳ではない。出席していた学生の一人がこの演説を途中で打ち切ったが、後日インタビューに答えてこう語っている。

(前略) 彼は自分の方を人民の子供、人民共和國の息子であり、人民の公僕であると考えべきなのに、上からものを言おうとするんだ。(中略) 総理というのは彼の職務だ。僕だって共和国の公民だ。我々は対等なはずだ。

(後略)

…他應當把他自己看成是人民的子女，人民共和國的兒子，人民公僕，他却擺老資格。…總理是他的工作。我也是共和國的公民，我們兩個平等。…

「スター…ウアルカイン」

【百姓】一九八九年六月十六日第194期

この学生は、公民として為政者と対等な立場に立とうとしながら、同時に為政者と人民、国家と公民との間に擬似的親子関係を想定している。

フィールドワークにおいて(17)、「親に喩えることができる概念は」という設問に対し、回答として挙げたのは一位が祖国、二位が党であった。ある二十四歳の家政婦は「党＝祖国＝母親」と捉えていた。この場合の祖国は、調査の結果によると母親ではありえても父親ではない(18)。「絶食書」下線(g)の「母なる中国よ！」は「父なる中国」と言い替えることは出来ないのである。こうしたことから、歴代王朝での皇帝と臣民との関係が父子に喩えられる場合や、現代の共産党政権下で「毛主席のよい子になる」と言っていた場合のように、かなり明確に“為政者”として意識した時には父となり、祖国或いは中国など、より概念

的な精神的帰属先として捉える時には、母となるように見受けられる(19)。

2) 大家庭としての社会

「絶食書」下線(h)「父さん、母さんたち、どうか悲しまないで下さい」、(i)「おじさん、おばさんたち、どうか心を傷めないで下さい」のように、社会の不特定多数の人々に親族呼称で呼びかける行為は、一つの社会を家庭に擬して理解する捉え方から生じる。中国社会における家庭を単位とした社会構造については、古今東西多くの言及があるが、梁漱溟の『中国文化要義』(20)では、中国社会の“大家庭”としての構造が次のように端的に述べられている。

中国の社会組織は一つの大家庭の中に無数の小家庭が何層にもはめ込まれた階層的家庭構造 (a hierarchical system of families) ということが出来る。いわゆる君は一国の父であり、臣は国君の子である。このような階層構造の社会の中では“個人”の観念はない。あらゆる人は父でなければ子であり、君でなければ臣であり、夫でなければ妻であり、兄でなければ弟である。中国の五倫はつまり中国の社会組織なのである。五倫を離れては他の組織はなく、個人をこのような階層構造の中に編入し、一定の地位に置いてその地位が果たすべき責任を課すのである。父には父の責務があり、子には子の、臣には臣が全うすべき責務がある。君もまた然りである(21)

梁氏はこの構造の起因を「倫理本位」に見ている。倫理とは人と人との関係ということである(22)。人が生まれると両親、兄弟などの存在が必然的に

生じる。父子は天然の基本関係であり、故に家庭が倫理の中心となる。父母がまず最初にあり、次に兄弟姉妹が生じ、長ずれば夫婦が出来、子供が生まれる。こうして宗族が形成されていく。社会に出れば学問の場では師弟関係があり、政治の場では君臣官民関係がある。こうして一人の人間は成長と生活範囲の広がりに伴い、四方八方に関係を生じていく。倫理は家庭に始まり、そこから広がっていく。人と人との関係には、その関係の深さ長さに応じた“情”が生じる。情には“義”が生じる。父の義は慈であり、子の義は孝、兄は友、弟は恭…という具合である。ある関係をより深くするためにこの情と義を重くすることが行われる。つまり師を“師父”と呼び、教を乞う側を“徒子”と呼び、更に官は“父母官”、民は“子民”、近隣朋友間で互いに“伯叔兄弟”を使って呼び合うことになる。こうして社会全体の各種の関係が家族化され、その社会に身を置く全ての人々が何らかの関係を持ってつながり合い、互いに果たすべき義を持つ。こうして目に見えない組織が形成される。つまり「中国人は家族関係を推し広げ、倫理でもって社会を組織する」(23)のである。

また、言語社会学者、鈴木孝夫は著書『ことばと文化』(24)の中で親族呼称による呼びかけ及び自称行為が持つ作用について、次のように述べている。

さて、父親が自分のことをパパと称することは、自分が相手(息子)に対して持っている親という役割を言語学的に確認することだといえる。またこれは同時に、間接的であり含意的ではあるが、相手に自分の子供としての従属的な役割を付与することにもなる。(中略)

同様にして息子の方から父をパパと呼ぶ行為は、二重の役割確認が含

まれると考えられる。その一つは直接明示的に、話しの相手に親としての役割を付与し確認することであり、もう一つは子供が相手(父)をパパと呼ぶことで間接含意的に自分が相手の息子としての役割をとる用意があることを表明することになる。

これは実際の親族間でのことであり、社会に於ける擬似的用法では、この作用をより強く持つはずである。このように、他人に対し親族呼称を用いることは、そこに家族関係を投影させ、それぞれの家族成員に付与されている倫理義務をも投影させる作用を持っている。

実際の用例を見てみよう。これは六月四日の武力制圧を三日後に控えた、六一国際児童デーに発表された李鵬首相から全国の児童へのメッセージである。

親愛なる子供たち、小さなお友達へ：

“六一”国際児童デー四十周年を迎え、私は大変嬉しい気持ちで中南海のおじいさん、おばあさん、伯父さん、叔父さん、おばさんたちを代表して皆さんにご挨拶いたします。楽しい記念日でありますように！

(後略)

亲爱的孩子们、小朋友们：

在“六一”国际儿童节40周年到来之际，我怀着十分高兴的心情，代表工作中南海里的爷爷、奶奶、伯伯、叔叔、阿姨们，向你们问好，祝你们节日快乐！

【人民日报】八九年六月二日

「首都、大会を挙行し“六一”デーを祝う」

中南海は周知のように党・政府の中央機関があ

り、首脳陣が住む区域である。そこに住み働く人々を、全国の児童たちの「おじいさん、おばあさん、伯父さん、叔父さん、おばさんたち」としている。こうして人々は社会の中で自分の年齢、性別に応じて、家族成員のいずれかの位置を無意識の内に選び取り、その位置に付随する家族の一員としての役割を引き受けるのである。

大学生から社会各層への呼びかけは「絶食書」の中にほぼ出揃っている。ここでは、ハンスト中の大学生を中心にして形成された、社会各層の親族呼称及び親族名称での呼びかけや自称の現象を整理しながらみている。

まず、幼児からみた場合：

数日前、私は（四歳になる）子供を連れて、天安門に出かけました。子供がたずねます。「かあさん、おじさんは何をしてるの？」（叔叔在干什么？）私は答えました。「おじさんやおばさんは偉大なお仕事をしてるの。お前たちの幸せな将来のために、がんばってくれているんだよ」

（叔叔、阿姨在干伟大的事业，在为你们幸福的将来而奋斗）

【工人日報】八九年五月二十日
汪平「ある母親の話」

四歳の子供からは大学生たちはおじさん、おばさん（叔叔、阿姨）となっている。

五月十七日、十八日は百万人デモとも言われた大規模なデモが行われ、政府機関を含め、社会各層の人々が街に繰り出した。その中には教師に引率された中学生や小学生の隊列もあった。中学生のプラカードには

「お兄さんお姉さん、お水を一碗飲んで下さい」

（哥哥姐姐，请喝一碗甜水）

「おじいちゃんたち、どうか出てきてお腹を空かしている私のお姉さん、お兄さんに会って下さい」

（爷爷们，请来看看我正在挨饿的姐姐哥哥）

【光明日報】八九年五月十八日

「学生、国を愛し、我、学生を愛す。
民主の潮流は遮るべからず」

とあり、小学生のスローガンやプラカードには

「鄧（小平）おじいちゃん、趙（紫陽）おじいちゃん、李（鵬）伯父さん、早く出て来てお兄ちゃん、お姉ちゃんを助けてあげて」

（邓爷爷、赵爷爷、李伯伯快出来，救救大哥哥、大姐姐）

「私とお姉さんの心は一つ」

（我和大姐姐一条心）

「兄さん姉さん、私たちの心は通い合う」

（哥哥姐姐我们心连心）

【中国青年報】八九年五月十八日掲載
写真より

とある。小学生や中学生からは、大学生たちはお兄さん、お姉さん（哥哥、姐姐）であり、為政者は年齢に応じておじいちゃん、伯父さん（爷爷、伯伯）となっている⁽²⁵⁾。

先程、六一児童デーに発表された李鵬首相のメッセージを引いたが、この児童デーには父兄に連れられた児童（文字通りの子供たち）が天安門広場に大勢訪れ、大学生たちも児童たちを歓迎する催しを行ったりしている。広場に掲げられた横

断幕には

「お兄さんお姉さんも君たちと喜びを
共にします」

(大哥哥大姐姐与你共欢乐)

『人民日報』八九年六月二日

「『六一』天安門広場一瞥」

の語が見える。小学生、中学生たちが広場の大学生たちを“哥哥、姐姐”と呼ぶのに対し、彼らも自らをこう名乗り、児童たちを自分たちの弟、妹と認めている。

次は、大人たちであるが、労働者のデモ行進を捉えた写真の中で、ある若い男性が掲げるプラカードに

「兄貴も黙っちゃいられない！」

(老大哥急了！)

『血染的風采』（海燕出版社）

とある。“老大哥”は労働者に対する親しみと尊敬を込めた呼称として使われてきた。社会の中で長男のように生産の責任を担う階級という訳である。これに対し、女性の側からの呼びかけもある。五月十七日の百万人デモの横断幕に

「姉妹が立ち上がる」(姐妹起来)

『光明日報』五月十八日掲載写真

と書かれている。妹格である大学生たちに対する連帯の表明であろうか。

兄弟姉妹の次は父母である。

「人の子の父母たるもの、どうして
傍観していられようか」

(孩儿父母岂能旁观)

『人民日報』八九年五月十八日掲載写真

これはハンストをしている学生の実の親によって書かれた可能性もあるが、これを見る人々には、次の記事の例にみるような世の父たり母たる者の発言として作用しただろう。

私は一人の労働者であり、また一人
の子の母です。

我是一个工人，也是一个孩子的母亲，
...

(この女性は天安門広場で、大学生たちからビラを渡される。そこには詩が書かれていた)

「おかあさん、(中略) だけど私は
心の底で涙と共にあなたを呼んでいる
のです… “おかあさん”！」

繰り返し読むうちに目の前が次第
に曇ってきました。世の母親の心は
皆同じです。私は声を大にして叫び
たい。「学生さんたち、祖国も母親
もまだあなた方を必要としているの
です！」と。

…天下母亲的心是相通的，我多么想
大声疾呼：“同学们，祖国和母亲都
还需要你们啊！”

『工人日報』八九年五月二十日

汪平「ある母親の話」

五月二十一日に天安門広場の学生組織から発表された「全国人民に告げる書」はこれら世の父たり母たる層への呼びかけで始まっている。

親愛なる全国の皆さん、私たちを生
み育ててくれたお父さん、お母さん
たち：

亲爱的全国父老，生我养我的父亲
母亲们，

「全国人民に告げる書」

天安門広場百余校大学代表(26)

「皆さん」と訳した“父老”は郷村社会における年配の男性に対する敬称であるが、「郷親」の語と共に郷村社会の構成員全体が共有する同族意識を背景にして、何か事ある時に共同体全体に呼びかける際に使われる。「お父さん、お母さんたち」という複数形の呼びかけは、広場にいる大学生たちの実の父母も含めてであろうが、世の父たり母たる人々全体への呼びかけである。この場合の「生み育ててくれた」は、第一章で紹介した学生の遺書にある「人民が小学、中学、大学へと進学する機会を私に与えてくれた」と同じ発想から出た言葉だろう。こうして“子供たち”を守るべきと期待される全国の人々に呼びかけるのである。

3) 社会における「大人と小人」

下線(b)「私たちの肩はまだ幼く、…」、(e)「…私たちはまだ子供なのです!」のような自らの若さ(未熟さ)の強調が為政者への批判、社会の同情と理解を求める訴えとして成立するのは、社会という大家庭の中における「大人と小人」、つまり成熟している「大人」に対する未成熟な「子供」という二分類の意識を背景に持っているように思われる。前節で述べた「爷爷、奶奶、伯伯、叔叔、阿姨」及び「爸爸、妈妈」がこの大人に含まれることになるが、このケースでは、大人は「爷爷、奶奶…」に細分化されず、保護及び指導、愛護を与える側(敬意と服従を受ける側)の総体として認識され、その総体に対して子供(“孩子”)が保護及び指導、愛護を受ける未成熟な側(敬意と服従を示す側)として認識される。「絶食書」(e)「私たちはまだ子供なのです!」の“子供”はいつかは「大人」になる「小人」としての「子供」であり、1)における“国”という親に対する場合の「子」がいつまでも「子」の

ままであるのとは異なっている。

人はいつか保護される側の「小人」から保護を与える側の「大人」へ成長していく。大学生たちが「私たちはまだ子供なのです!」と叫ぶのは、“まだ”子供だから守ってほしい、という訴えである。聞き取り調査で、十六歳の女子高校生が普段は大人と対等に扱われたいけれども、「自分はまだ“子供”だから分かってほしい、助けてほしい(自己还小, 希望别人照顾照顾)」という気持ちの時には自分で自分のことを“子供”(孩子)と言うこともある、と回答した。大学生たちは、「子供」と自称することで、大家庭の中で大人たちの保護、愛護を受けるべき位置に身を置こうとしたのである。

「絶食書」に見られるような学生たちの自らの若さ(未熟さ)の強調と、彼らの若さに対する大人たちの敏感さもこのような「大人と小人」の意識と「大人」側に課せられている保護の義務から生じるように思える。ここに大人たちの反応の例を挙げる。

五月十八日、私は北京と上海の大学生たちの愛国民主活動を支援する上海作家のデモに参加し、(中略)彼らの血の氣い幼い顔を目にした途端、涙が込み上げてくるのをどうすることも出来ませんでした。

…當我看到他們蒼白焦黃的囡囡面孔,
淚水湧上、湧上我的雙眼。

「暗闇のベランダに涙す」

一九八九年五月 黄宗英(27)

この文章に見られる“囡囡面孔”(幼い顔)の“囡囡”とは幼児を表現する語で、幼児の丸々した感じや、あどけなさを前にした大人の愛情がこもる言葉である。

(前略) 祖国のために餓えに身を晒し、生死の境にある子供たち (孩子) のことを思うと、声を上げて泣きたくなる。食事の度に罪の意識を感じないではいられない。私はどうして彼らと共に重荷を背負うことが出来ないのか? あんなにも若い命を投げ出そうとしているというのに、私が何をためらうのか? 私には彼らのために喪章をつける時を待つことしか出来ないというのか?

私は喪章の山を片付けた。私がやりたいことは、そして私に出来ることはただ一つ。すぐに手を差し伸べて、千万に上る人々の手と力を合わせ、若者たちの幼い肩の上の巨石を一個一個持ち上げよう。奇蹟を起こせるか、さもなくば若者たちと共に倒れるかだ。

…將壓在年輕人的稚嫩的肩膀上的巨石一點一點托起，要麼石破天驚，要麼和年輕人倒在一起。

戴厚英「夜明け前」一九八九年六月⁽²⁸⁾

戴厚英のこの文章では、学生たちの「幼い」肩を形容するのに「稚嫩」という語を使っている。学生たちの「絶食書」では、自分たちの肩の形容に「柔嫩」を使い、「私たちの肩はまだ幼く、死は私たちにはまだあまりに大きな重荷である」と訴えている。どちらの形容詞も、植物の芽などの若い命の柔かさや未熟さを表現する語である。大人たちの反応には国家という大家庭の中で、年長者の方がその家庭全体のために果たすべき責任が重いはず、(この国家存亡の危機に) まだ幼さの残る若者たちがここまでしているのに自分たちは、と言う自責の念がある。若者たちに対し、保護を与え模範たるべき立場であるという責任感から、

「子供たちを救え!」というスローガンとなるのである。

結 び

ここまで、一九八九年の民主化運動の高まりの中で人々がとった言動を手がかりに、年齢や社会的地位、職業を異にする人々が一つの社会の構成員として無意識の内に共有している文化的基盤について考察してきた。冒頭に「“中国的な”文化符号」、「中国人の心の琴線を揺り動かしている何か」と述べたが、中国国外の華人の反応からは、それらが「中国人であることの意識」(认同感)を刺激していることが伺われた。一つの文化には、そこに生まれた人間をその文化体系の中の人間に育て上げる諸要素がある。中国においても、中国(の文化、社会、人)を“中国”たらしめる要素、所謂“Chineseness”というものがあるはずである。本稿で取り上げた「“国”との間の擬似親子関係」、「大家庭としての社会」、「社会における『大人と小人』」の三点は、中国文化における社会関係の把握のパターンであるといえる。ある文化への帰属感を形成する要素としては、このような社会観や国家観の共有の他に、神話や歴史知識、文学遺産などの共有が考えられる。海外の華人たちの反応の中にみられた幾つかの文化符号…「炎黄子孫」などの同じ始祖を持つという観念や、屈原などのいわゆる民族英雄の系譜などがそれらにあたるだろう。本稿では、「中国文化の一側面」として、この“Chineseness”考察の試みをはじめたばかりである。今後も私の中国研究の究極の課題は、この“Chineseness”をめぐるものとなるだろう。

最後に、本稿の執筆に当たっては、当時の新聞・雑誌を始め、多数の文献を参照した。直接引用しなかった文献については、ここに逐一挙げることを省略させて頂いたことを特にお断りしておきたい。

< 卷末注 >

- (1) 「事件」と呼ぶ場合、武力制圧の顛末に重点が行ってしまいがちである。本稿が扱おうとするのは運動が展開されていた期間全般であるので、「八九年民主化運動」と呼ぶことにする。
- (2) 『争鳴』一九九四年六月号に元社会科学院歴史研究所の包遵信がハンスト発起人である元北京大生、王丹について語る文が掲載されている。包氏は五年が経過した時点での見解として、「ハンストをやらなければ、情勢は民主勢力にとってより有利であった」、「ハンストの開始で理性的な民主化運動が統制を失った情緒的な大衆運動に変質してしまった」の二点で二人の観点が一致していると語っている。
- (3) 本稿で取り上げる宣言以外に筆者が目にしたのは「北京市大学学生絶食請願団」、「首都大学自願絶食者」の署名で発表された2種。いずれもごく短い簡潔な宣言文である。『チャイナ・クライシス重要文献』矢吹晋編訳（蒼蒼社）第1巻236頁～240頁参照
- (4) 本稿における中国語表記の区別（簡体字または繁体字）は、原文表記に従ったもの。
- (5) 文革後、最初に起こった民主化運動である「北京の春」（一九七八年）の時期に雑誌『四五論壇』を発行した徐文立の文章に次の一節がある。
- 天下とは我々の天下、国家とは我々の国家、社会とは我々の社会である。
我々が発言せねば、他に誰がいか？
我々がやらねば、他に誰がいか？
- 直接的にはこれの影響と思われる。
- (6) 『書経』康誥に「赤子を保んずるが若くせば、惟ち民其て康父せん」とある。「赤ん坊を育てるように民を大切にするように」と治者の心得を説いているのであるが、時代が下って『漢書』循吏伝、龔遂には「其民飢寒に困し、吏恤ならず。故に陛下の赤子をして陛下の兵を

潢池中に盗弄せしむるのみ」とある。「赤子」一語で君主の治下にある民の総体を意味するようになっている。

- (7) 『老子』前篇十八「徳を含むの厚き者は、赤子に比す」、『孟子』離婁下「大人なる者は、其の赤子の心を失はざる者なり」等。
- (8) 八九年の胡耀邦前総書記追悼の新聞記事にも次のような一節がある。

偉大な赤子の心（赤子之心）がその鼓動を停止した！思いやり深く誠実な人民の息子（人民的儿子）が逝ってしまった！

【人民日報】八九年四月二十二日

- (9) 「献身」と訳した部分は『血染の風采』（海燕出版社）及び雑誌『九十年代』に収録されている版では「藏身？」となっているが、『チャイナ・クライシス重要文献』（蒼蒼社）（『新聞導報』号外に拠っている）と柴玲の「我和我的同學們怎樣理解民主」（『從五四到河殤』蘇曉康主編／風雲時代出版収録）では「献身」となっている。ここでは当時、「天安門広場防衛指揮部総指揮」であった柴玲の文章に従った。
- (10) 文献によっては、この後にハンスト要求や開始時間などの箇条書が続いているものもあるが、『チャイナ・クライシス重要文献』（第1巻237頁、239頁）によれば、これは異なる署名で出された別の宣言文である。「絶食書」の文面は『九十年代』一九八九年六月十六日「北京事変特集」所収のものを基本とし、他に『チャイナ・クライシス重要文献』矢吹晋編訳（蒼蒼社）及び『從五四到河殤』蘇曉康主編（風雲時代出版）、『血染の風采（北京學運實録）』兆強等編著（海燕出版）と照合した。
- (11) タイトルは「我和我的同學們怎樣理解民主」（私と私の仲間たちはどのように民主を理解していたか）。『從五四到河殤』蘇曉康主編（風雲時代出版）所収。同書は一九九一年五月、三日間にわたりプリンストン大学 PRINCETON

- CHINA INITIATIVE (中國學社) で開催された同名のシンポジウムの記録。
- (12) 父母への報恩は儒家思想の根幹ともいうべき「孝」を支えるものである。『論語』陽貨篇に「子生まれて三年、然る後に父母の懐を免る。夫れ三年の喪は、天下の通喪也」の言がある。父母に対する喪の期間が長すぎるという意見に対し、父母の育ての恩を言う。「国恩」の考えは漢代以降であろうが、中国人に「報恩」の語で思い浮かぶ事例を挙げてもらおうと出て来るのは、岳飛—文天祥—陸遊などいずれも国難に際して国に忠を示す事例である。
- (13) 『天安門落書』串田久治 (講談社) 153頁所収。
- (14) 「絶食書」冒頭。
- (15) 『アジア文化圏の時代』レオン・ヴァンデルメルシュ (大修館) 178頁。
- (16) 『許家屯香港回憶録』許家屯 (香港聯合報) 430頁。許氏は北京の民主化運動を事実上支持する態度をとり、その後の厳しい情勢の中で米国へ出国した。
- (17) 一九九四年八月、本稿に先立つ修士論文の論証収集のため北京市及び近郊農村 (河北省三河市) において、約一ヵ月にわたりフィールドワークを実施した。窓口となった研究機関が外国人によるアンケート調査実施に難色を示したこと、調査の実際の関心が人々の意識の問題にあったことから、調査対象者一人一人に個別に聞き取りを行う形を採用した。他人に対する親族名称・呼称の擬似的用法を中心に設問しながらも、その場の回答に応じて新たな質問を重ね、背景にある社会観及び国家観を探ることを課題とした。本稿においても関連する事項に関しては、この調査結果を引用する。対象者内訳は以下の通り：

性別	男	25名
	女	15名

年齢層	10代	5名
	20代	5名
	30代	12名
	40代	8名
	50代	7名
	60代	3名
教育水準	文盲	1名
	小学	4名
	中学	7名
	高校	6名
	専門学校	10名
	大学	6名
職業／身分	大学院	7名
	農民	1名
	農村幹部	6名
	高校生	4名
	大学／院生	6名
	研究者	3名
	教師 (中学)	4名
	労働者	6名
	“个体户”	4名
	政府職員	1名
	基層幹部	2名
	外資企業職員	2名
(18)	フィールドワークでの設問、「父として喩えることができるもの」に対し、最も多かった回答は「何にも喩えることが出来ない」であった。「祖国を父と喩えられないか」と追及すると、一人の例外を除いて、回答者全員が「母ではありえても、父ではない」と明確に区別した。	
(19)	実は「父なる中国」の例を一件見かけた。次の詩である。	
	(前略)	
	中国、自分の息子を殺した父親	
	今夜また実の娘を凌辱する	
	(中略)	
	この白い手は私たちの父親を殺すことが	

出来る（後略）

「狂った女」1989年5月

『從魏京生到吾爾開希』侯吉諒

（海風出版社）184～188頁

聞き取り調査の結果では、「母」は通常あるが
ままだが全面肯定される概念であって、理性的批
判の対象にはなりにくいようである。ここに挙
げた詩の例は、“中国”という自分の帰属すべ
き対象に否定的感情を持った際に、母のまま否
定するのではなく、父に置き換えてしまうという
特殊な例ではないか、と今のところ考えている。

(20) 『中國文化要義』梁漱溟著。一九四九年路
明書店初版。一九八七年学林出版社から再版。
本稿は『梁漱溟学术精华录』鲍霁編（北京师范
学院出版社）収録のものに拠った。

(21) この部分は『中国文化要義』274頁に引用
されている張東蓀『理性與民主』（龍門書店）
第三章。字句の異同を『理性與民主』によって
訂正した。

(22) 費孝通の『乡土中国』（三联书店、25頁）
では、『釈名』が「淪」の意を「倫也、水文相
次有倫理也」としているのを挙げて、「倫」と
は水面に広がる波紋のように、「己」を中心に
近きから遠きへ、親から疎へと広がっていく社
会関係である、と説いている。

(23) 『中國文化要義』梁漱溟（『梁漱溟学术精
华录』北京师范学院265頁）

(24) 『ことばと文化』鈴木孝夫（岩波書店）
184頁

(25) 勿論これらのプラカードは、引率の教師た
ちの手になるものであろう。これらは当時の感
情の高まりの中で自然に選ぴとられた言葉であ
り、小学生、中学生たちはこうして自分たちの
社会における位置を学びとり、家族関係を投影
した社会関係の把握というパターンをも受け継
いでいくことになる。これは丁度一人の子供が
この世に生を受けて、ものを言い始めるように

なると、大人から口移しで家庭の中の誰が「お
父さん」か「お姉さん」かを学んでいくのと同
じである。中国では他人に対し子供に挨拶をさ
せる時、「叫…」（…と呼びなさい）と「叔叔」、
「阿姨」などの親族呼称で挨拶させる。子供は
家庭から隣近所と行動範囲を広げる中で、一個
一個擬似家庭の枠の中を成長しながら、ふさわ
しい呼称の選ぴ方と社会構造を学んでいくこと
になる。

(26) 『悲壮的民運』（明報出版社）87頁

(27) 『從魏京生到吾爾開希（中國大陸民主運動
總覽）』侯吉諒主編（海風出版社）98頁

(28) 『從魏京生到吾爾開希』侯吉諒主編（海風
出版社）226～228頁

